親の因果が子に報う



"The Sins of the Fathers" (1877)

まぶしい街灯の光を浴びながら往き来していた。ところが、こうした夕暮れ後の場景は、 じられないことだが、この娘からほんの数歩しか離れていない所では、 みを和らげようとしている哀れな若い娘の苦悶に満ちた泣き声だけだった。一方、ほとんど信 て静寂を破るものと言えば、ズキズキするこめかみを湿った石畳に押し当てることで、その痛 闇はト ・チ型の間口 ンネルの中央部に吊してある壊れたガス灯の点滅でかえって深まるばかり、 .の広いトンネルがあった。そこは寒々とした薄暗い闇と静寂に支配されて 大勢の人々が大通 そし とあ りの

炎がパッと燃え上がり、上を向いた娘の顔がかすかに照らし出され、それを見た彼はドキッと 光景自体に大して心を動かされなかったが、ちょうどそのとき、一陣の突風が吹いてガス灯の この痛ましい泣き声がたまたま耳に入り、トンネルの入口付近で立ち止まった。 レナード・ヴィンセント ②は、学生仲間の社交クラブから近道して家路を急いでいたとき、 最初は、 、その

るイングランドの大製造業都市「の中心部では珍しくも何ともないのだ。

うに青白く見える顔 乱れ髪、輪郭こそ美しいものの、時には苦悶の表情で不気味に見え、時には死人のよ ――こうしたものは今まで見たことがない光景だったので、彼はまるでメ

して強い関心を呼び起こされた。娘の黒い、ぎらぎらした目、

肩までふさふさと垂れてい

・ゥーサ ねたのは、 (3) の顔を見たかのように、 ほんの一瞬だった。涙にむせびながら悲しみに心を奪われるあまり、彼女が自 一瞬、 身動きができなくなった。 とは いえ、 彼が態度を決

分の存在に気づいていなかったので、彼は彼女の方へ歩み寄り、そっと肩に触れてみた。する

かけた。

上なく深い同情の念を呼び起こされた。数分間、二人は黙ったまま立って互いに見つめ合って 見ていたが、その努力の甲斐もなく、堅く結んだ唇をわなわなと震わせていたので、 ており、多少こけた感じがした。プライドはの高そうな落ち着きのない目で青年の顔をじっと だけでなく空腹までもが彼女の美しさを損ない始めているかのように、両方の頬は青白くなっ いたが、やがてヴィンセントが口を開こうとしない娘の決意を読み取り、おずおずと先に話し まいとしたが、大粒の涙が頬を伝わって流れるのを即座に抑えることはできなかった。 彼はこの 悲しみ

ず、彼はこの娘の視線にたじろぎそうになり、実際の階級は自分より下ではないのではなかろ うかと思ったほどである 質素な服を見ると、自分より下の階級に属していることは明らかだった。それにもかかわら ねるのは君を助けることができる――いや、助けたいからなんだ」 っていたので、 この青年は、 「どうして悲しいのか、教えてもらってもいいかな? この時の口調には自分でも少し驚いた。目の前にいる娘の姿勢や、 社会的地位が低い者たちに話しかける時はいつも幾分ぶっきらぼうな態度にな 無礼な奴だなんて思わないでね。 すり切 尋

ることなく、やがて低い声で早口に素っ気なく答えた。 彼の同情を引いた娘はしばらく決断がつかないように立っていたが、依然として表情を変え

と彼女はすぐさま振り向き、彼をじっと見つめ返してきた。娘は必死になって感情を顔に出す

「ひとりにしてください。ご親切には感謝しますが、助けは必要ありません」

レナード・ヴィンセントは同情しているにもかかわらず笑みをこぼした。

もらえればの話だけど」 心だけからではないんだよ。間違いなく助けてあげることができると思うんだ――そうさせて 「それはどうかな。ぼくを信用してくれないのかい? 君の信頼を求めてるのは単なる好奇

彼女はもう一度すばやく返事をしたが、その口調は先ほどのとは違っていた。

助けは必要ありません。ホントに必要ないんです」 「ご親切には感謝します。こんなに優しく話しかけられたのは久しぶりですから。ですが、

まだ表情が変わらぬ彼女の顔をのぞき込んで、青年はまたほほえんだ。

イドは高いよ。似たもの同士ということで、打ち明けてみないかい?」 「プライドの高い人だね。こんなにプライドの高い人に会ったのは久しぶりだ。ぼくもプラ

表情で、一瞬、その顔が明るくなった。このように彼女が打ち解けた気配を見せただけで彼に 今度は彼女が笑みをこぼす番だったので、はるか昔は幸せだったと何となく思わせるような

は十分だった。引き続きヴィンセントがせきたてるので、彼女は二、三度ちょっと躊躇してか

ら、彼の要求に今にも応じるような様子を見せた。

でも、おそらく、あなたは立派な家庭と立派な両親をお持ちなんでしょうね。それじゃ、手短 「みじめな話をしては、ご迷惑でないでしょうか? お話しなくても、全部ご存じでは?

よいかもしれませんから」 に述べてみましょう。また泣いてしまうと思いますが、そうした方が私のプライドにとっては

だった父親が死に、美人だった母親が金持ちの地主の懇願に負けて再婚するまでは、幸せいっ め、とうとう彼女は自分の生活に我慢できなくなったようだ。 あった。この地主 に憎まれたが、それは彼女が昔の粗野な友人たちと縁を切ろうとしなかったことが主な理 ぱいだったそうである。母はプライドが非常に高かったので衝動的な行動に走ってしまい、そ 代や学生時代について、そして誠実な友を持つことの喜びについて簡単明瞭に語った。 の結果として厳しい罰を受けることになったという。ひとり娘のローラ・リンドンは義理の父 それで、彼女は若い時のこと――イングランド南部の小さな市場町で過ごした楽しい子供時 ――がさつで下品な性格だった――が哀れな義理の娘をひどく虐待したた

あと一度だけ彼女の姿を見かけました――ああ、神様、もう二度と再び彼女とは会いませんよ しまったんです。あの子がどうなったかなんて訊かないで。⑤ 考えるだけで恐ろしいわ。その したが、かわいそうにリジーは厳しい生活に耐えられなくなり、そして――私のもとを去って て北部にやって来ました。それから数週間は、針仕事で得た少ないお金でなんとか暮らしてま それで家出をすることに決めたわけです。いつも一番の親友だった同い年の女の子と連れだっ 「この私に何ができたでしょうか?」かわいそうな母のためにも自殺はできませんでした。 私ですか? ご覧のとおり、生きてはいますが、ただそれだけです。生活するのに十

謝してます。ずいぶん遅くなったみたいですわ。お休みなさい」 いての話です。助けることなんかできませんよ。でも、助けてやろうって考えてくださって感 捨て鉢な気持ちになって出てきたんですが、その理由も行き先も分かりません。これが私につ 分なお金を稼ぐこともできなくなりました。体もどんどん弱ってるような気がします。今晩は

次の瞬間には立ち去ってしまっていたところだった。彼は急いで追いかけ、再び彼女を立ち止 また目に込み上げてくる涙を隠したい思いで、彼女はすぐさまヴィンセントに背中を向

葉とともに受け入れてもらえた。 できるだけの縫い物の仕事を――見つけてやろうと考えた。そちらの申し出は即座に感謝の言 できないとすぐに悟った。それで、代わりに彼女に針仕事を――なんとか生計を立てることが 「でも、助けてあげることはできるさ。助けないわけにはいかないよ、ミス・リンドン」 最初、彼は衝動的にお金を渡そうとしたが、そんな申し出は歓迎されず、承諾させることも

「感謝いたします」と彼女ははっきり、しかし淑やかな口調で答えた。「でも、 「それから」とヴィンセントは別れ際に言った。「また会えるよね? 遊びに行ってもいいか いらっしゃら

ありがとうございます」 ない方がよろしいですわ。ずっと針仕事がありますもの。このたびは仕事をいただき、本当に

そうして二人は別れた。

気兼ねなく何でも話すようになった。 えのよそよそしい態度が消えるまで時間を要したものの、彼女の方もだんだん朗らかになり、 週間もすると、自分の所には来ないでほしいという彼女の願いに従っていないことが判明し ローラに仕事を見つけてやることに関して、レナード・ヴィンセントは約束を守ったが、数 。しかし、そうこうするうちに、この新しい男の友人と話す時に、生来のプライドの高さゆ

親に会談を求め、ローラの来歴や現在の境遇を嘘いつわりなく説明しながら、同時に自分たち かない過ちだったと分かるようなことだけはしないように、じっくり考えてほしいと恋人に対 優勢であった。ほどなくして、彼女もやっと遠慮がちに愛を告白したが、あとで取り返しのつ 尊敬という仮面の下で激しい愛情を抑えるのに長い間どんなに努力してきたかについては、 えて上がっている彼女の身を焼き尽くすような情熱については、さらに、彼女がよそよそしい うことはすでに分かっていたが、最初は感謝の念によって点火され、今では心の中で激しく燃 の結婚を認めてくれるように頼んだ。 とんど気づいていなかった。激しい愛情を抱いていたローラも、相変わらず自制心の方がまだ てるよ、君を妻にしたい」とローラに言ってしまった。彼女が自分に対して無関心でないとい とうとうヴィンセントは、今や抑えきれないほど強烈になった衝動のなすがままに、「愛し しかし、彼はどのような結果になろうが無頓着で、その時の勢いに押され

は息子の知らせを聞いて激怒した老ヴィンセント氏であったが、やがて考え直して息子に はそれに鼻持ちならないプライドが加わり、昔以上に利己的で偏屈な性格になっていた。 身によって蓄えられたものである。 © その性格は、もちろん初めから物欲的であったが、 老ヴィンセント氏は引退した綿糸紡績工場主だった。彼の莫大な富は自分の事業に対する献 今で

効果的な手段として卑劣な悪知恵を使ってやろうという気になった。 父親同様にプライドが高かったものの、下劣なほどではなかった息子 -に対し、怒るよりも

与でがあるかもしれないという期待などは抱かずに、まずは自分自身の努力で妻を養えるぐら いになることという条件であった。 老ヴィンセント氏は一つの条件を付けて結婚に同意するふりをした。それは、父から財産分

ながら、会談の結果を待っていた。 ローラは表面的には落ち着いて見えたが、実際には激しく苦しみもだえるような不安を感じ

「尋ねてくれましたか?」と、彼女は恋人が返事をもらってすぐ会いに来てくれたとき、せ

きたてるように大きな声で言った。

「万事うまくいったよ、君」と彼は答えた。「でも、ぼくたちは二人ともまだ若いよね。 お互

をみてくれるから。ぼくは外国で一年ほど過ごしてくるよ」 いに約束を忠実に守ろうじゃないか。結婚するまで君はぼくの家で暮らせばいい。両親が

ローラは自分の激しい感情と立派に戦い、嬉しそうな顔をしようと努めた。それから一週間

後、彼女は老ヴィンセント氏と同じ屋根の下で暮らしていたが、レナードはすでにアメリカに 向けて船出してしまっていた。

* * *

*

な魅力®を結合させ、まばゆいばかりに――今にも大人の女性として花開きそうな、はちきれ 子たちは立派な服を着たわりには動きがぎこちなく、女の子たちは自然のままの魅力と人工的 る日であった。卒業生のクラスは全員ご満悦の様子で、こうした式典によくあるように、男の 強と(我らが共通の友、レナードもその一人となっていた)先生たちの仕事の成果が披露され ランド ®でレナード・ヴィンセントの姿を見ることになる。学年歴がちょうど終わったばかり んばかりの多数の蕾がついた華麗な花束のように――光かがやいて見えた。 で、夏休みが始まろうとしており、今日は学校生徒が全員集合させられている。生徒たちの勉 それから二年が経過した。今回、我々はオールド・イングランドではなく、ニュー・イング

巻状に結いあげた)ふさふさの茶髪に至るまで、それはもう優雅そのものだった。顔はきりっ 下から顔をのぞかせる青の蝶リボンがついた上靴から、後頭部に鎮座した(簡単だが上品に渦 ニーは背が高くはなかったものの、均整のとれたプロポーションで、時おりモスリンの それでは、このクラスの首席であるミニー・ウォレンという若い女性に注目してみよう。ミ の服

て、花びらのようにすべすべで柔らか、唇に関しては――これはもう筆舌に尽くしがたい。す とりすました表情になっていた。彼女の頬はおそらく普段の式典よりは少しだけ赤らんでい を浮かべているのだが、 とした目鼻立ちとは言えないが、掛け値なしの美貌を有している。普段は最高に魅力的な笑み この時は集まった人たち全員から注視されているという意識からか、

然ながら抱くような、そんなプライドとは異なる感情症を含んでいなかっただろうか? たかにするように-づけされていた。しかし、先生の目にチラッと見て取れた喜びの感情は、ミニーの頭を学識ゆ ――美貌に恵まれた顔とみごとに調和するように――尽力してやった人が当

べての人たちの目が、なかでも彼女の先生であるレナード・ヴィンセントの目が、ミニーに釘

決して忘れず、何週間も定期的に愛情のこもった手紙を書き送っていたし、婚約者の方も誠実 二年という時間の経過は何をもたらしたか? レナード・ヴィンセントはローラとの約束を

た。その後すぐレナードが父親から受け取った手紙に理由が説明されていた。父親が熱のこも な愛と気高い人格を示すような手紙を返していた。ところが、突然、彼女の手紙が来なくなっ った慰めの言葉や不自然に思えるような悔やみの表現を使って手紙で述べていたのは、 口 ーラ

親の因果が子に報う が、恋人であれば抱くような悲しみを感じていなかったのだ。彼は、ローラが自分の妻になる が急に熱病にかかって、すぐさま亡くなってしまったことであった。実を言うと、この突然 ことを常に願って暮らしていると分かっているかぎり、彼女を裏切ることなんか性格的に絶対 の訃報にレナードは深い悲しみをまったく感じなかった。彼はショックを受けるには受けた

外見 命を即座 たちの目には文句なしに感じのよい男と映るような外見 もなかったし、いかなる意味においても女殺しとは言えなかったが、それでも彼をよく知る人 み始めていたのは、このような経緯があったからに他ならない。ヴィンセントはハンサムで 分で意識しながらも別の女性との新たな愛を――その種子はすでに蒔かれていたのだが 点がもっとたくさん必要だったのだ。 認識していた。妻になる予定の女性が単に献身的であるだけで満足できるほど、彼は立派な心 はローラが自分の伴侶としてもっと知的な女性であってほしいという自分の気持ちを自分でも る憐れみや自己満足の要素が多く含まれていたのである。イングランドを離れてすぐさま、 た。実のところ、初めから彼の愛には自分で想像できないほど――認めたくないほど――単な の持ち主ではなかった。つまり、彼の憐れみの心は完璧なものではなかったので、相手との接 い人気者になった。 彼女を失うという運命に甘んじることができるほど、彼の気持ちには変化が生じてい 洗練された教養が加わると、ますます彼を好感が持てる魅力的な男にしてしまうような に甘受してしまい、 を備えていた。陽気で落ちついた性格でもあったので、彼は父親が自分に課した運 たちまち生徒たち(特に若い女生徒たち)の間で他を寄せつけな ローラの死を告げる手紙を受け取ったあとすぐ、 ――快活で愛想のよい態度、 かなりの

卒業式の出し物は大成功であった。歌唱、朗読、暗唱はどれも、集まった保護者や友人たち

できない男であった。しかし、彼女がそばにおらず、いろいろと考えることもあったからだろ

はいたしません」

音が聞こえた。すると、「どうぞ」という返事も待たずに、ミス・ウォレンが部屋に入ってき り始めたが、ヴィンセントが自分の部屋で最後の片づけに精を出していると、扉をノックする の間では、楽しかったと大評判だった。とうとうすべてが終わり、人々の群れもばらばらにな

「で、ヴィンセント先生、今日は満足いただけましたかしら?」

は 「文句なしだ、ミス・ウォレン。とりわけ君に対してはね。実にチャーミングだったよ、君

ミニーは先生のお世辞を無視しているように見えたが、いつもの流暢な口調で続けて言

「ああ、ヴィンセント先生、グレイス・ウィリアムには 彼女の詩文の暗唱ぶりには

注目されましたか? とっても優雅でしたが・・・」

すまない人がね」 間違いなくね。でも、他にも暗唱を発表した人がいましたよ。『とっても優雅でした』では

ミニーはイライラしたように見せかけ、かわいい態度で首を横に振った。

「ホントに腹の立つ先生ですこと! お世辞の言葉なんか望んでませんよ、まったく、 いえ、先生と言うところでしたが、私はもう生徒じゃありませんから、先生と呼ぶこと

らは『ミニー』と呼ぶことにしよう」 ミニーは少し顔を赤らめ、彼に背を向けて窓の外を見た。しかし、そのあとすぐ、また振り 「結構ですよ、ミス・ウォレン。じゃあ、お返しに私も君の名前からミスを取って、これか

向いてヴィンセントの顔を見た。 「来学期もまた、ここにいらっしゃいますか、ヴィンセント先生?」

「断定はできませんね。状況次第です」

「それって、ホントに腹の立つほど漠然とした、お得意の哲学的な言いまわしですね。 ミニーは陽気な笑い声を上げ、今にも部屋から出て行かんばかりに、扉の上に手を置いた。

くちゃなりません。では、失礼します」 来れば、はっきりしますわ。でも、みんな帰ってしまったんで、ホントに私も急いで帰宅しな

えたが、すぐに彼女の方へ歩み寄った。 彼女は扉を開け、大急ぎで立ち去るふりをした。一瞬、レナードは決めかねたかのように見

生?」と言った。 彼女は立ち止まり、無関心そうな態度を装って振り向き、「何かおっしゃいましたか、先

「じゃあ、『よい夏休みを』とも言わずに、君は行ってしまうのかい? 驚いたね、ミス・ウ

口調で答えた 「もう私のことをミスでお呼びにならないと思っておりましたわ」と、彼女は商人のような

後で、もう会うことがないかもしれないというのに」 「あ、忘れてた。『さようなら』と冷たく言う以外には何もないのかい、ミニー? これが最

このように告知されてミニーはハッとしたが、それはかろうじて認識できる程度のものであ

不自然に思えるほど、ちょっぴり真剣な口調であった。「学校がまた始まっても、私は地元に 「まあ、私は遠くへ行ったりしませんわ」と彼女は答えたが、多分その時の状況を考えると

「でも、ぼくは多分そうしないでしょうね。永久にイングランドへ戻ることになるだろう。

ここにはずいぶんと長くいたから」

留まりますから」

ね、私たちって愚かな人間ですもの。では、さようなら」 「それじゃ、もう私たちアメリカ人にはうんざりなさったんですか? まあ、そうでしょう

り、唇まで持ちあげてから、そっと放してやった。いつものようにミニーは楽しげに笑った。 彼女は繊細な白い手を差しだしたが、それはほんの少し震えていた。レナードはその手を取

精神をお持ちなんでしょうね」 「そうやってイングランドの人たちはさようならをするんですか? さぞかし立派な騎士道

うに告げたりしません。さようならをするつもりが絶対ない時にだけ、そうするんです」 「いや」と、レナードはミニーに近づきながら真剣に言った。「ぼくたちは別れをそういうふ

16

んわ!」 「ヘーえ!」それじゃ、こうしたいつもの挨拶を交わさずに、私は失礼しなければなりませ

顔を見つめるだけで、何も言えなかった。 横に立ち、その手を自分の手で握った。振り向いた彼女は頬のバラ色を一段と深め、ただ彼の 彼女は背を向けて扉の方へゆっくりと歩いた。すると、ヴィンセントはたった一歩で彼女の

ないふりをしてるけど。この手をずっと握っててもいいかい?」 彼女は、非常に珍しいことであったが、目を地面に伏せ、いくぶん聞き取りにくい声で答え 「ミニー」と、レナードは真剣な低い声で言った。「ぼくの気持ちは分かってるよね -知ら

「そんなお願いをされては、ここに長居はできませんわ」

ミニーが返事をしなかったので、彼は沈黙を承諾の証と解釈した。 「とても綺麗な手だね。もう一度キスしてもいいかい?」

「とても綺麗な唇だね、ミニー。キスしてもいいかい?」

あげた時の薄茶色の目の表情が、ミニー・ウォレンはその美しさといたずらっぽさも含めて、 この質問はほとんどささやくような声でなされた。彼女は言葉で返事をしなかったが、

すべて彼のものになったことを雄弁に語っていた。

返事で、父親は強情さがなくなった息子に対し、胸襟を開くことはなかったにせよ、ともかく メリカに留まり続けたいと息子に言われた時も、なぜか悲しみを覚えなかったのである。 ントにイングランドへ帰ってきてほしいと特に思ってもいなかった。少なくともしばらくはア 財布は開いてくれた。老ヴィンセント氏は、自分自身の理由もあってか、レナード・ヴィンセ 工場主が親戚として恥じる理由など少しもない家庭の娘を妻にめとったと書かれていた。その 結局のところ、彼はアメリカを離れなかった。父に宛てた手紙には、この年老いた綿糸紡績

* * *

*

老父はローラが死んだことを手紙で知らせると同時に、権謀術数に富む男の所へ行き、レナー ドからの手紙を偽造させた。その手紙は、 とって不名誉でしかないような結婚の計画を挫折させるために企てた残酷な策略だった。この ように、本当に死んでしまったのか? いや、それは金だけが自慢の老父が、自分たち父子に それでは、 ローラ・リンドンはどうなったであろうか? レナードが父の手紙で知らされた ローラが教育を受けていないため、 レナードもしば

らく前から二人が互いに不釣り合いではないかと考えるようになったこと、これまではこの問

題について沈黙し、そうした疑念を乗り越えようと努力してきたが、最後はローラを婚約から

ねたが、拒絶されるや、夜の間に家から姿を消し、そのあとは音信不通になった。老父は策略 たあと、 契りを結ぶように願っているとはっきり言っていたので、よけいに彼女は信じて疑わなかっ なく親切に見える態度でふるまっていたし、レナードが成年 ㎝ に達したら即座に二人が夫婦 ものとは一瞬たりとも思わなかった。老ヴィンセント氏は抜け目なく、慎重に、 しない手紙も、今まで受け取っていた手紙とそっくりだったので、この哀れな娘は偽装された い住所を知らない方がよかろうと、手紙には述べられていた。偽造は非常に巧妙で、見栄えの つかるだろうという内容であった。同時に、自分は前の住まいから引っ越したが、彼女は新し 結果はまさに父が予期したとおりになった。ローラは、悲しみで数日間ほど苦悩を味 突然、海を渡ってアメリカに行けるだけの金を都合してくれるかどうか義理の父に尋 いつもこの上

なることで、夫を本当に幸せな男にしてやろうと、固く心に決めていた。レナードはゆったり なミニーは、いつも自分自身の外見に注意を払っており、自分と関係のある物や人に対して した気持ちで優雅な日々を送っていたが、のんきな性格であったので、優秀な幼妻の愛情あふ いたニュー・イングランドの小さな家庭は、平和で快適そのものだった。きれい好きで几 すべて自分同様に非難の余地がないようにしようと、さらには妻としてもっとよ 方、今ではヴィンセント夫人となったミニー・ウォレンがきちんと主婦の務めを果たして È

が完全に成功したことを確信し、満足げに両手をこすりながら、別の問題に注意を向けた。

解放してやるのが自分の義務だと思うようになり、そうなっても彼女にふさわしい夫がすぐ見

あったが、なるようにしかならないという哲学(のためか、取り返しのつかないことは即 ほどかけ離れたものではなかっただろう。 を通して達した結論は、彼の父が哀れなローラの希望をくじくために利用した結論と、 あきらめて自分を慰めていた。また、そうした回想をする時でも、おそらく、彼が一連の思考 れる心づかいにとても満足していた。たしかに時おり昔の故郷のことや、かつては自分にとっ て非常に大切な気がしていた女性のことについて、振り返って思いをめぐらすことがあるには それ 極に

* * * *

大嫌いなヴィンセント夫人は、この機をとらえてブラインドを下ろし、いつになく早い時間で じで、間違いなく吹雪が近いぞという警告を発していた。いかなる種類であれ、陰気なことが かるんでいたが、数時間ですら太陽の光を出し惜しんでいた空は、依然としてどんよりした感 はあったが、シャンデリアの明かりをともした。 で有名だったが、最近はその名声を必死に保とうとしていた。街路は近ごろ降った雨でまだぬ 一月のある日の午後のことだった。ニュー・イングランドの天気は変わりやすいということ

ざの上で両手を組みながら言った。「お願いだから、その本を脇へやって、少しは私の相手を

「ねえ、レナード」と、チャーミングな幼妻は夫の足もとにある低い腰かけに座り、

してちょうだい」

てから、少し退屈そうに欠伸をした。 なく今日の天気と何らかの関係があった。お願いされた彼は本を脇へ放り出し、手足を伸ばし 小説を朝から読みふけっていた。ヴィンセント夫人がそれとなく言ったように、これは間違い レナードは、彼にとっては珍しいことだが、今日はずっと口数が少なく、何か難解きわまる

新聞を手にとった。そして新聞をめくって娯楽欄を見るなり、少し大きな声で読み上げた。 それから、突然ある考えが浮かんだかのように、彼は立ち上がって、そばの床の上にあった 「うーん、そうだな・・・実を言うと、かなり気がふさいでるんだ」

ム・トンプソンの驚異の物まね』とミス・ウィリアムズによる十八番の歌――ちぇっ! コミ ック座 ロ は滑稽歌劇 ロ ――ああ、少しはましだ。お題は『アンゴ夫人の娘』ロ か。どうだい、 「グローブ座 いは『大草原の野蛮人』の最終日――つまらん! バラエティー座 いば『ジェ

ミニー? 今晩はこの劇場で過ごそうよ」

いたものの、反対しているような感じではなかった。 ニュー・イングランドの若い娘らしく観劇が大好きだったミニーは、慎み深い表情を装って

「そうね、レナード、たしかに久しぶりだし・・・」

っと貸馬車を予約してくるね」 「それで結構!」と、夫は口をはさんで言った。「夜食 ® もそちらで取ろうじゃないか。ちょ 腕に手を置いた。

騒動にも気づいた。どうしたのだろうか? すっかり演技に夢中になっていたミニーは、突然、夫がハッとするのを感じ、同時に舞台上の 始める頃には、本日の特に愉快な出し物を心ゆくまで楽しむ準備が完全にできていた。 が、そうこうするうちに数多くの小型双眼鏡の焦点が何も知らない彼女に集まっていた。レナ ードは徐々に屈託のない快活さを取り戻していたが、オーケストラが有名な楽しい曲の演奏を って、緞帳が上がるのを待ちかねていた。ミニーが人前に姿を現す時によく見られた現象だ すべてが素晴らしかった。歌劇の主役は有名なスターで、その歌声で劇場全体を魅了した。 やがて準備が完了し、貸馬車も到着した。ほどなく二人は舞台の真ん前の席にゆったりと座

舞台から運び出されてますよ」と、彼女の隣りの人が言った。 い、心配そうな表情が浮かんでいた。眼前の些細な騒ぎについては一考だにせず、彼女は夫の ミニーがレナードを見ると、その顔には彼女が今まで一度も見たことがないような、 何でもありませんよ。ただ、コーラスの一人が気を失っただけです。ご覧なさい、

「何でもない、 「どうしたの、レナード?」彼女はささやき声で尋ねた。「気分でも悪いの?」 何でもないよ」と、彼はあわてて返事をした。「ほんの一瞬にすぎなかった。

「すぐに出ましょう。私のショールを取ってちょうだい」

-劇場を出ても構わないかな?」

に続いていた。外に出ると、ヴィンセントは心変わりしているように見えた。 二人は席を立って劇場をあとにしたが、舞台上の演技は何事にも邪魔されなかったかのよう

がもったいないから、訪問するって何度も約束してた町の友だちに、この機会を利用して会っ てこようと思うんだ」 の楽しみを邪魔するとはホントに馬鹿だったね。今はもう大丈夫だ。このまま帰宅すると時間 「ミニー」と言った彼の声はわずかに震えていた。「ひとりで家に帰ってくれないかい? 君

張るのをやめ、彼を残して家に帰った。

初めは抗議していた彼女も、レナードがイライラした素振りを見せ始めたので、最後は言い

大気中にちらほら見え始め、やがて雪が降りしきるようになった。レナードは友人を訪問する い感情がうごめいていることを語っていた。 つもりなどない様子で、頻繁に懐中時計を見ながら、劇場の前を急ぎ足で往ったり来たりして 吹雪になりそうだった空も今までなんとか持ちこたえていた。しかし、今はもう白い薄片が 彼の頭の中では昔の記憶がよみがえっており、眉をひそめた心配そうな表情は何か激し

通る人々の顔をじっと見ていたが、誰も見覚えがないようだった。しかし、ついに背の高い女 の前で立ち止まった。すぐに扉が開いて、コートにくるまった人影が次々と現れた。彼は前を っている狭い、薄暗い通りを急いで歩いて行き、まるで誰かを待っているかのように、 とうとう十時の鐘が鳴り、人々が群れをなして劇場から出て来だした。彼は劇場に沿って走 楽屋口

返り、 と震えながら泣きじゃくった。 された地点まで来ると、彼は彼女のすぐ近くまで行き、手で触れてみた。彼女はあわてて振 軽やかな素早い足取りで歩きながら彼女のあとに続いた。そして、二人が街灯にかすかに照ら 見えなかったものの、歩き方は見間違えるはずがないものだった。彼は新たに降った雪の上を 性が踏み段を降りて、 彼の顔を穴があくほど見つめていたかと思うと、相手の首に両手で抱きつき、 しばらく逡巡したあと、暗い通りを歩いて行った。その顔はレナードに わなわな

薄情なことです! でも、こうやってまた会えたんですから、すべて赦してあげますわ お姿は見えました――あなただと即座に分かりましたわ! あるまじきこと—— あまりに

くりと、困難を伴うかのように語った。 があくほど彼を見つめていた彼女は、相手の顔が幽霊のように青白いのに気づいた。彼はゆっ し終えるまで何もしゃべれなかった。やがて彼は首から彼女の両腕をそっと取り除いた。穴 彼女はすすり泣きながら、できるだけ早口で途切れ途切れに話していたので、彼は彼女が話

くと一緒にいるのを見た女性は妻なんだから」 「ローラ、ぼくのことを考えては駄目だ。ぼくたち二度と再び会ってはいけないよ。君がぼ

突如として激昂した狂気のにらみに変わったからである。彼女は何か話そうとしたが、できな 彼は黙りこんだ。 彼女の顔から放たれていた半ば喜ぶような、半ば非難するような眼光が、

かった。レナードは彼女の表情におびえ、控え目な口調で話を続けた。

7

話すことがたくさんあるんです。さあ、私の家に来て、少なくとも一時間ぐらいは一緒に座っ も穏やかに語った。「それで、すぐに立ち去りたいんですね それから、彼女は一生懸命に自分を抑えようとしているかのように、非難めいた口調ながら 「大した問題じゃありません。どうでもよいことよ。そのとおり――私は死んだのでした!」 彼女は彼の両手を自分の両手で軽く握り、話すというよりは、ささやくように言った。 ――私と昔話もせずに? 私には

て話をしてください」

らはずれてしまい、周囲には数軒の家しか見えなかった。嵐は恐ろしげに荒れ狂っており、雪 都度もっと速く歩くようにと手で合図した。こうやって二人がしばらく歩いていたとき、 けで精一杯だった。時おり彼女は振り返って、彼がまだ付いてきていることを確認し、 り、彼の前方をほとんど飛ぶように進んで行く背の高い、黒い人影を見失わないようにするだ ナードは自分たちがどちらの方角へ進んでいるのか分からなかった。雪とみぞれが顔に当た たので、彼は苦労しながらも彼女のあとに続いて行った。その時には雪もどんどん降り積も ードはどこへ行こうとしているのかを確かめるために目を上げてみた。二人とも普通の道路か 彼は彼女の声に抵抗できず、何の返事もしなかった。彼女がサッと向きを変え、道案内をし 吹雪がヒューヒューと狭い街路を通り抜け、家々に白い吹きだまりを作り始めていた。レ 、その

死んだっ

「聞いてくれ、ローラ。ぼくが悪いんじゃない。ぼくは聞かされたんだ、君が

果が子に報う」
②という布告の立会人となった。

んだ。深く積もった雪がまもなく川をまた滑らかな白い表面に戻し、神秘的な川底が「親の因

はすでに歩くのが困難になるほど深く積もっていた。彼は立ち止まって彼女に叫んだ。

「ローラ、これ以上は行けないよ。君はどこに住んでるんだ?」

道のようなものが見えた。二人とも同時に立ち止まった。レナードは目をこらして吹雪と暗闇 付いて行った。ついに二人は短い階段の最上段の所に来た。その下には長い、平坦な、白い小 の先を見ようとしたが、突然、後ろに引き下がった。 彼女は彼の方を振り向かず、ただ手で合図をしながら、「もう少し先よ」と叫ぶだけだった。 レナードは自分の居場所がまったく分からなかった。この上なく当惑しながらも、彼はまだ

が狂気による馬鹿力を出していたからである。川へ落ちて行く音、薄い氷の膜がひび割れる へと引きずり込んだ。彼は必死にもがいて抵抗しようとしたが、それも徒労に終わった。彼女 彼女は気が狂ったような、かん高い笑い声で応じ、彼の首を両手で激しくつかみ、階段の下 「ローラ! どこへ行くんだ? うわぁー、川じゃないか、ここは!」 階段の一番下で水しぶきが上がる音が聞こえたかと思うと、すぐに静寂がすべてを包みこ

訳

- (1)作者が学生時代を過ごした新興産業都市のマンチェスター。
- (2)(Vincent) のそれはラテン語で「征服する (conquering)」。 レナード(Leonard)の語源の意味はドイツ語で「勇敢なライオン(lion + hardy)」、ヴィンセン
- (3)ギリシャ神話に出てくる三人姉妹の怪物ゴルゴンの一人 (Medusa)。 頭髪は蛇で、黄金の翼と真鍮

の爪を持ち、見る者を石に変えた。

- envy, sloth) の第一のものである。 「おごる者は久しからず」(「箴言」一六章一八節)という格言を想起するまでもなく、後者はキリスト教 において精神的な死をもたらす七大罪(seven deadly sins: pride, covetousness, lust, anger, gluttony, プライドには、よい意味の「誇り(proper pride)」と悪い意味の「高慢 (false pride)」があるが、
- (5) の場合は半分近く)が、低賃金と重労働ゆえに副業として売春をしていたという。 当時の統計によれば、都市で働くお針子の約四分の一(生活を支えてくれる夫や親のいないお針子
- 判の対象になった。 た自助の精神 (self-help) は自由放任主義の下で美化されると同時に、それが内包する利己主義はよく批 老ヴィンセント氏は「自分の腕一本でたたき上げた男(self-made man)」の典型であるが、こうし
- この場合は婚姻によって継承的に財産権が移転するように処分される財産分与(marriage settle-

ment) のいと。

米国北東部の地方で六州(Connecticut, Maine, Massachusetts, New Hampshire, Rhode Island.

Vermont)を含む。中心都市はボストン。

若さゆえの魅力と化粧ゆえの魅力の意

(9)

(10)羊毛や綿などの単糸で平織りした柔らかい薄地の布。 日本ではメリンスとも呼ぶ。

(11) 生徒ではなく、大人の女性として見た場合の愛情。

(12) 誓う時に、 中世ヨーロッパの騎士道的恋愛(courtly love)では、騎士が貴婦人に礼節を尽くして絶対的献身を 貴婦人の前にひざまずき、差し出された手にキスをする。

(13)な契約ができなかった 当時のイングランドでは、二一歳の成年(age of majority)に達するまでは、 父の同意なしに法的

(14)の意志や力ではどうにもならない運命に従って必然的に生ずるという宿命論(fatalism)であった。 自然主義作家ギッシングの哲学は、人間の境遇、行為、 出来事などを含めて、すべての事象は人間

(15)一八七三年の火事の翌年に再建されたもの。 作者が知っていたボストンのワシントン・ストリートのグローブ座 (Globe Theatre, 1871-73) は

ボストンのコート・ストリートにあったパレス劇場 (Palace Theatre, c. 1891-1931) の前

八六九年にアデルフィー劇場(Adelphi Theatre)に改名されている。 ボストンのコミック座 (Theatre Comique, 1865-69) はグローブ座と同じ通りにあったが、

喜歌劇

ク(Alexandre Charles Lecocq, 1832-1918)の代表的なコミック・オペラで、日本でも「浅草オペラ」 『アンゴ夫人の娘』(La fille de Madame Angot, 1872)は、フランスのオペレッタ作曲家、ルコッ

オペラ・ブッフ (opéra bouffe) は十九世紀フランスのオペレッタの一ジャンルで、茶番狂言風の

28

観劇後の軽い晩餐(after-theatre supper)のこと。

(1917-23) のレパートリーに入っていた。

a jealous God, and visit the sins of the fathers upon the children)の一部。これは旧約聖書の「出エ 二一章一九節、「エレミヤ書」三一章二九節、「エゼキエル書」一八章二節では逆に、罪の結果である災 ジプト記」二○章五節と三四章七節、「民数記」一四章一八節で使われている語句であるが、「ヨブ記」 イングランド教会の祈祷書(Common Prayer)における「十戒」の文句(I the Lord thy God am

いは罪を犯した者の子孫ではなく、本人自身が受けるべきものだと書かれている。